

第4章 考 察

1 筑後市内の近世窯業

豊臣秀吉による朝鮮半島出兵に伴い多くの陶工が日本へ渡来し、各地に窯業を浸透させていった。北部九州でも肥前有田、同伊万里同唐津、豊前上野、筑前高取などに陶磁器の窯が開窯し、さらに各地へと分散していった。

この動きは筑後国内でも見られ、筑後市内にも多くの窯が開かれている。これらは戦後の産業構造の変化に伴い、あるものは閉窯し、あるものは規模を縮小しながらも現在に伝えられている。今回報告された羽犬塚寺ノ脇遺跡では、筑後市内の焼き物と思われるものが、攪乱内からではあるが出土している。ここではこれらの窯とその産出品について、大まかな概要を述べてゆく。

水田焼

筑後市内の近世窯の中で、最も古い歴史を持つものが水田焼である。これは、その始祖本田能登の祖先が菅原道真の大宰府配流に従い九州に移り住んだという伝承にも現れているように、太宰府天満宮との強いつながりを持っている。開窯時期は天正年間（1573～1592）で、神具用の素焼きをその紀元としている。この時期の窯跡は、現在の大字水田字裏町にあったというが、現在のところ正確な場所を確認されていない。この付近では、多くの焼き物の破片が出土するということである。水田焼は農作業の合間の産業として広まり、3代左兵衛、4代庄左衛門の時にそれぞれが土鍋を献上、5代新

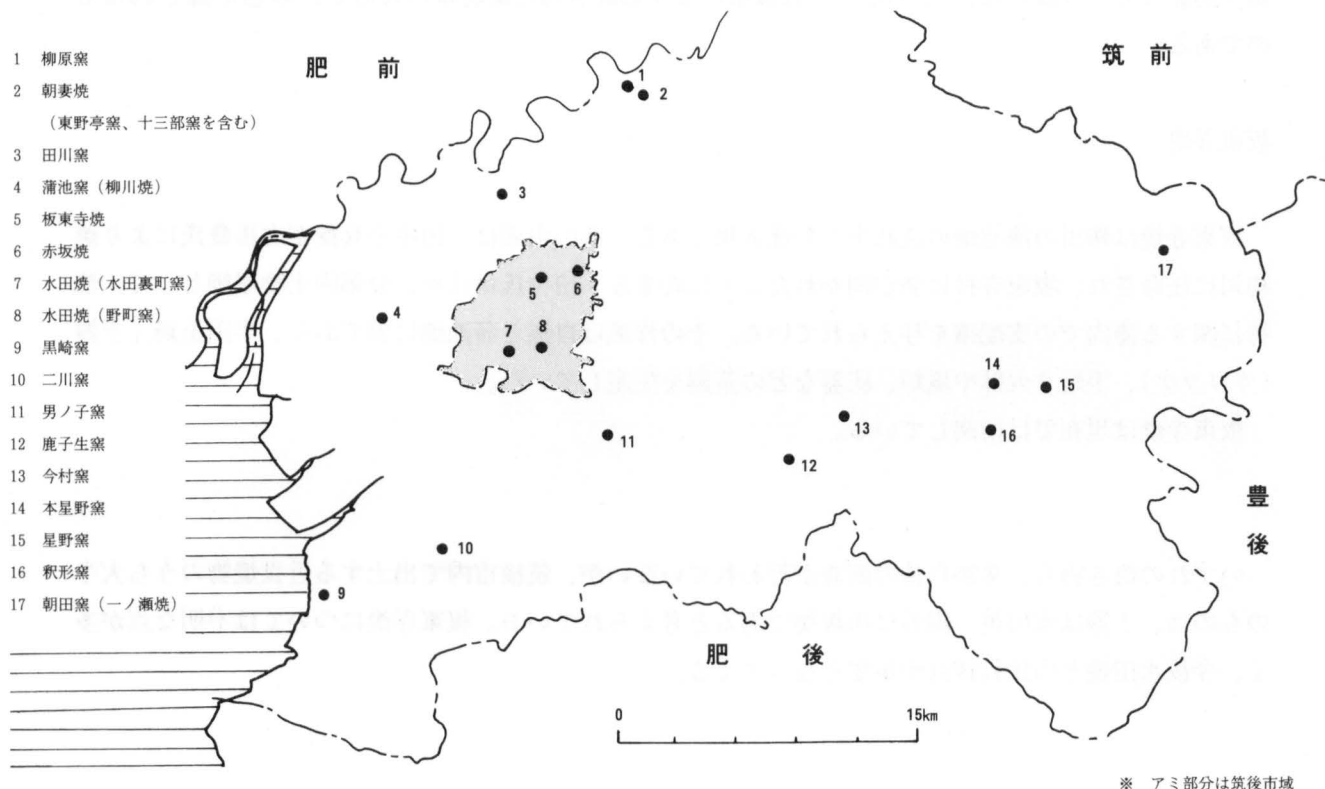


Fig. 9 筑後国近世窯位置図 (S = 1/379,000)

左衛門の時に御用窯に下命された。その後、近藤家が分家し、現代に至るまで水田焼の中心を担っている。

水田焼の献上品は「半田土鍋」と呼ばれる素焼の炮烙で、茶の湯に用いられる灰器である。「半田炮烙」は水田焼の他に柳川の蒲池焼のものも指している。水田焼が得手としているものは民具用の素焼きの製品で、大甕、火鉢、瓦（赤目・青目の2種あり）、井戸側などがある。また、民芸品として素焼きの人形がある。これは「水田人形」と呼ばれ、各種の節句や正月の際に、贈答品として親しまれてきたものである。この中には着色されたものも見受けられる。これは山城の伏見人形を参考に作られたものである。また明治に入ると土管、鉢、火消し壺、七輪、植木鉢などが盛んに作られるようになり、釉薬を用いることも見られるようになった。

現在、水田焼は産業構造の変化に伴い、その規模を縮小してきている。現在では素焼き、陶器ともに製作しており、焼締めによる渋い色合いを特徴としている。

赤坂焼

赤坂焼は、水田の次郎吉が良質な陶土を求め、文化13年（1816）に赤坂の地に窯を開いたのが始まりと伝えられる。その後、窯は三原富次、緒方次助と受け継がれ、以後緒方家の系統によって経営された。藩政時代には御用窯として御用品の製作を行い、天保年間（1832～1836）には柳原焼（9代藩主頼徳創始の御庭焼）の焼成にも従事した。また、肥後正代焼は赤坂焼の工人井上利左衛門等によって開窯されたものである。

赤坂焼は当初、主に食器、茶器などの陶器を生産し、後には日用品、食器、植木鉢、土管などの生産を行っている。作風は筑前高取焼や肥後小代焼に似通っており、釉薬は蕎麦釉、藁釉、緑青釉などシソ釉の地に、他の釉薬のかけ流しを行う。「赤岡」「赤坂」の銘がある。赤坂焼の民芸品に、赤坂人形（別名「ててっぼっぼ」）がある。これは型により形成された素焼きの人形で、彩色が施されたものである。

坂東寺焼

坂東寺焼は柳川の蒲池焼の流れをくむ焼き物である。その由来は、田中平兵衛が有馬豊氏により焼物司に任命され、坂東寺村に窯が開かれたことに始まる。田中氏は代々、分領内土物屋師として、焼物に関する藩内での支配権を与えられている。その作風は自然と蒲池焼に似ており、半田土鍋、土器（カワラケ）、手焙り火鉢や風炉、灰器などの茶器を生産していた。

坂東寺焼は現在では閉窯している。

いずれの焼き物も、窯跡自体の調査が行われていないが、筑後市内で出土する近世焼物のうち大半のものは、土器は水田焼、陶器は赤坂焼であると考えられている。坂東寺焼については不明な点が多く、今後水田焼との比較検討が重要となってくる。

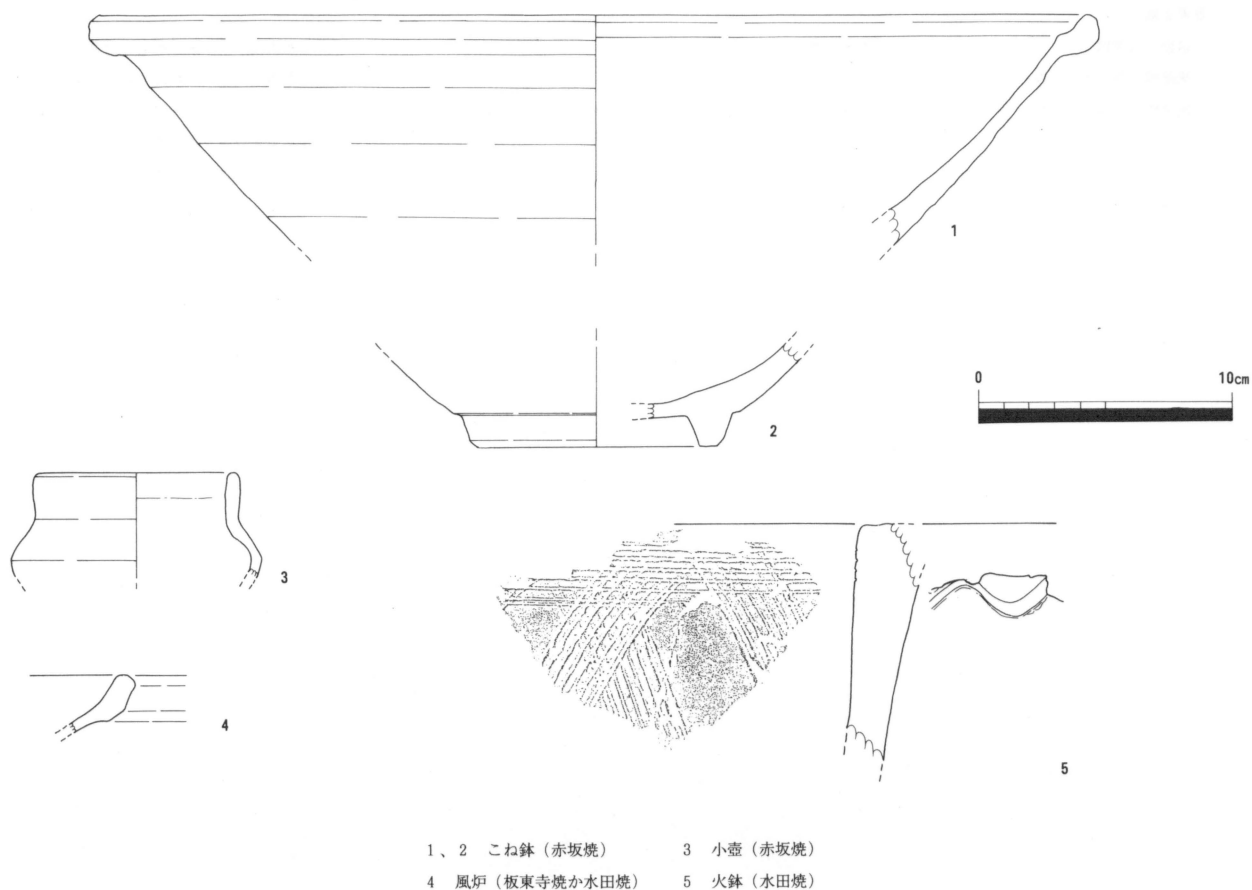


Fig.10 水田焼、赤坂焼、板東寺焼と思われる土器（羽犬塚寺ノ脇遺跡出土、S = 1 / 3）



Fig.11 水田人形（市内採集品・S = 1 / 2）

〈参考文献〉

右田 乙次郎
筑後郷土史研究会・編
筑後郷土史研究会・編
右田 乙次郎
右田 乙次郎 ・編
筑後市史編さん委員会・編

『水田の半田土鍋焼』
『筑後赤坂焼』
『三原家と赤坂焼』（筑後市むらの生いたちの記 第四集）
『赤坂・蔵敷むらの生いたちの記』
『水田校区郷土史』
『筑後市史』

筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 1973
筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 1977
筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 1977
筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 1978
筑後市教育委員会・筑後郷土史研究会 1981
筑後市史編さん委員会 1998